

首都圏マーケットをカバーする東京ビッグサイトで

展示ホールをフル活用 4年ぶり東京開催

160社超が集結

7月20日(水)から22日(金)の3日間、東京ビッグサイトで開催される施設園芸・植物工場展(GPEC)とスマートアグリジャパンの開催まであと2か月と迫った。2018年以来、実に4年ぶりの東京開催となり、目を追うごとにその熱気も高まってきている。出展申込は堅調で、すでに展示ホールはほぼ満中間の状態だ。160社超の出展各社は、来場者に向けて最新技術・情報を発信すべく準備を進めている。主催者側でも企画展示や特別セミナーなどの詳細がこのほど固まった。本号では最新の概況を紹介していく。

充実した展示ポリュームに 生産者も期待

東京開催は実に4年ぶりとなったGPEC/スマートアグリジャパンには、今回多くの企業が出揃った。2年半の間続いたコロナもようやく収束が近づき、今春以降、メーカー各社が続々と出展を決めた。募集していた展示スペースも残りあとわずかとなるなど活況だ。「ウイズコロナ」に社会全体がシフトし、すでに展示会には活気が戻っている。本展に来場する多くの農業生産者からは、「技術や情報が一堂に集うこの機会を見逃さないよう、仲間を募り訪問する予定」(いちご生産者)、「首都圏での開催は久々なので、ぜひ参加し最新の技術や製品など比較・検討したい」(トマト生産者)など大きな期待が寄せられている。



GPEC 施設園芸・植物工場展

持続可能な農業で 経営安定化を目指す

ロシア・ウクライナ情勢による燃料高騰、異常気象や人手不足などの経営を圧迫する課題が山積する日本の農業。今後、省エネルギー化や人手不足に対応した自動化・ロボット化など、ITやデジタル技術を駆使したスマート農業への対応が迫られる。今回のGPECやスマートアグリジャパンではこうした最新の農業技術や製品が展示され、農業生産者をはじめとした多くの関係者にとつてまたとない機会となる。

ハウス本体では、日本施設園芸協会の会員で業界を牽引するイノチオグループ、大仙 渡辺パイプ、サンキンB&Gといったハウスメーカーがそろい踏み。クボタ、カネコ種苗、ヤンマーグリーンシステムなど施設園芸をトータルに提案する大手メーカーも名を連ね、生産者が抱える様々な課題に対応していく。ハウス暖房の省エネ化では、ネボン、フルタ電機、ダイキン工業、イース、ヒラカワが出展。燃料高騰対策に対応した省エネ技術に期待がかかる。初出展の企業も多岐にわたる。ホリアキは、農産物の計量から包装まで流通に関わる業務効率化を提案。住化積水フィルム、バリテック新潟は、それぞれ高機能フィルムとCO2施用機を展示する。ほかにも、新規参入

コンサルティングのアグリコネクト、欧州トップシエアの生分解性樹脂製クリップを扱うレイモンジャパン、AI発芽検査のNTTテクノクロスなど、新たな出展者が加わることで、展示内容のさらなる充実がはかられる。

自動化省力化・DXで 効率アップを実現

わが国では、生産者数の減少が続く、一人あたりの作業負担が大きくなっている。その中で収量を向上させるためには、従来型からより高度な環境制御型ハウスへの転換と、自動化によるさらなる効率の向上が求められている。

環境制御の分野では、誠和、サカタのタネ、オンガエンジニアリング、ニッポ、スナオ電気など、10社以上が出展。ITを取り入れた高度な制御(温度・湿度)システムによる省力・省エネ化など最新の次世代型ハウスを展示する。施設園芸資材を総合的に提案する東都興業、4年ぶりの出展となるみづほ物産が自動カーテン装置を展示。初出展となるAGRI-STは、今秋からレンタルを開始するピーマンの自動収穫ロボットの実機展示をおこなう。無人防除機を出展する有光工業や、電動作業車のタキゲン製造など、省力化

に関わる技術にも注目だ。これからの農業を担う、DX化や自動化技術による「未来型農業」への転換をGPECで考えるきっかけとなる。

植物工場関連、多彩な出展



天候に左右されない安定生産で注目が高まる植物工場。完全人工型植物工場を導入した企業や新規参入をはかる事業者に対し、さまざまな情報を提供するGPEC。大和ハウス工業は、三協立山と共同開発した植物工場システム提案するほか、エスベックミック、GPF、グリーンテックアンドロボが、大・中・小さまざまなタイプの植物工場を展示し、設備改善を求める事業者や新規参入事業者の要望に応える内容などを提案する。

植物工場での栽培に欠かせない植物育成用LEDでは、ジャパンマグネット、シーシーエス、豊川温室が出展。コスト低減や収量増加を実現するなど、幅広いラインナップとなっている。

未来型農業への 転換を提案

Smart Agri Japan スマートアグリジャパン

「スマート農業」。AIやIoT、DX、ロボットなどの最先端技術は、農業を取り巻く課題を解決する重要な糸口。新進気鋭の若手生産者からは熱視線が注がれる。GPECと同時に開催の「スマートアグリジャパン」にはサプライヤーとして異業種からの

参入を目指す多様な企業が集まった。SMCは、空気圧制御機器のトップメーカー。FAで培った自動化技術を農業分野へ提案する。アイエスエイ、オネストは環境制御装置、セラク、インフォアームは自社が持つIoTソリューション駆使して農業を支援するクラウドシステムを披露する。プリッグス・アンド・ストラットン・ジャパニーズは、傾斜地でも安全に除草作業ができるリモート式芝刈り機を展示する。

出展スペースを拡張して 最終受付中

事務局では、現在、来場誘致活動に着手しているが、こうしたなかでも「まだ出展が間に合うか」といった問い合わせが多く寄せられている。出展スペースに限りがあるなかでも1社でも多くの申し込みを受け入れられるよう、事務局では会場レイアウトを一部調整。柔軟な受入体制をとっている。開催まであと2か月と迫るなか、出展に関心のある場合は早めの連絡をして欲しいとしている。(事務局…03-3503-7703)



生産者必見

課題解決のヒントがここに

セミナー・主催者展示の内容が決定

毎回盛況で注目

特別セミナー

GPECでは、業界の最新動向や、全国の優良生産者による多収事例、スマート農業などをテーマにした23セッションのセミナーを開講。各分野におけるトップランナーの講演を「無料」で聴講できるとあって、毎回盛況だ。このセミナーを自当てに来場する生産者も多い。

今年の展示会のメインテーマでもある「持続可能な農業」の実現に向け、SDGsへの取り組みや女性活躍といった、時宜を得たテーマのセッションがラインナップ。初日には各次世代拠点におけるカーボンニュートラルを基調としたシンポジウムも実施される。また、3日目に

既に公式サイトでは、各セミナーの聴講予約を開始。毎回、満員となるセミナーが多く、事務局では早めの予約を推奨している。(セミナー・主催者展示の詳細は招待券または公式WEBサイトを参照)

は、米国の施設園芸事情をテーマとした海外からのリモート講演もあり、より広い視野で未来の日本農業を考える機会となる。ほかにも、トマト、パプリカ、きゅうり、イチゴといった栽培品目ごとの事例紹介など、生産現場の課題解決に結びつくヒントが満載だ。

スマートアグリジャパンでも、3セッションを用意している。露地におけるスマート農業をテーマにした内容で、農研機構からは収量予測や取組事例の発表をおこなう。

主催の日本施設園芸協会が推奨する日本型大型(1ha)モデルハウスの実物を会場内の主催者コーナーに展示。ハウス本体、内部設備、栽培システムを合理化し、過剰な施設・設備投資を抑えつつ高い生産性と収益性が期待できるモデルハウス。経営規模拡大や新規参入を目指す生産者にとって、実物を見ることが

大型モデルハウスを展示

「未来型農業」を体感できる。実用間近のピーマン「自動収穫ロボット」、農研機構が開発した「収量予測システム」などの実物を披露、

悩みを解決

「生産者相談コーナー」

主催者展示エリア内に設置される「生産者相談コーナー」はGPECならではの企画。各テーマのスペシャリストが生産者や参入希望者の悩みや疑問に答える。今回は、①補助金②栽培技術③養液栽培・植物工場④公庫・融資⑤スマートグリーンハウスの5つの相談ブースを設置。普段ではお目にかかれない専門家に相談できる貴重な機会。ぜひ活用してほしい。(無料・予約不要・当日参加可)



Table with 2 columns: Seminar ID (GP-01 to GP-11) and Seminar Details (Date, Time, Title, Speaker, Location). Includes a note at the bottom: 'その他、注目のセミナー・主催者展示が目白押し! 詳細は招待券または公式サイトより!'

出展企業・団体一覧 (50音順 ※は共同出展)

(5月27日現在)

Large table listing exhibitors and organizations in Japanese alphabetical order (あ through 海外). Includes names like アイエスイ, カネコ種苗, 誠和アグリカルチャ, etc.

事前来場登録・セミナー聴講予約 好評受付中!

出展各社の展示製品など、展示会の最新情報は、こちら ▶▶▶ www.gpec.jp

